

石槁健夫著

釋全
落窪物語精解

東京健文社發行

昭和八年四月五日印刷
昭和八年四月十日發行

全落窪物語精解

定價金貳圓八拾錢・送料拾貳錢

ALB

編輯者 石橋健夫

發行者 鮎貝秀三郎
東京市麴町區飯田町六丁目四十九番地

印刷者 白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十七番地

發行所

健文社
東京市麴町區飯田町六丁目四十九番地

振替東京四四八六四番
電話九段(33)一八二八番

賣捌所



全國有名書店

凡 例

一、本書は主として高等諸學校に於て國文學を學ぶ人、又は檢定試驗を受ける人の爲に、その他一般に國文學を愛好しこれを鑑賞しようとする人の爲に書いたものであります。

一、本書の體裁は、全篇を適宜に節を分けて本文を掲げ、本文の上に口語譯を、本文の次に語釋を掲げました。始めは各節毎に評を加へる考でしたが、此の物語の如きものには敢て主觀的な獨斷を必要としないと思ひ、且又紙數のかさむのを憚つて、別に項目を立て、評を述べる事を止めました。但し語釋の中に所々に自ら評めいた言葉が入りこんでゐます。

一、本文は日本文學大系本を底本とし中村秋香の大成の本文を參考しました。本文批評は重要な作業であり、落窪物語の本文については研究の餘地があると思ひますが本書を著作する目的から、諸本の異同の比較はしませんでした。

一、語釋は中村秋香の落窪物語大成から非常に多くの恩恵を蒙りました。又、口語譯には全譯王朝文學叢書を參考致しました。

一、卷頭の解題はきはめて簡明に、初めて此の物語を読む人の爲に書いたのであります。精細な評論を欲する人は解題の末に掲げた諸學者の研究に就いてみられる事を希望します。

一、讀者の便に供へる爲に卷頭に落窪物語中にあらはれた主要な人物の系圖と服裝調度等の圖を掲げ、卷末に語の索引を添へました。

解 題

内 容 と 價 値

落窪物語は四卷あつて、繼母の爲に虐待されて寢殿の放出の落窪なる一間に放ちおかれた美しい姫君が、落窪の君といふあだ名までつけられて數々の虐待に身も世もあらぬ程の悲しい思をしたが左近少將といふ貴公子に見出されて、その妻となつて榮え、繼母は種々の報復を受けるといふ説話を描いた物語である。

繼子いぢめの小説は後世に至り多くあらはれたが、落窪物語はその祖であるといはれてゐる。

性格描寫や自然描寫の缺けてゐるのはその短所であるが、全篇に變化があつて、しかも統一があり、所々滑稽の筆もあつて、讀者に對して非常に興味を與へるすぐれた物語である。精細な性格描寫は缺けてはゐるが、主人公たる落窪の君や左近少將、さては繼母などの面目は巧みな筆によつて十分に表現されてゐる。

古來この物語を勸善懲惡の思想を以て解釋したり、因果應報の理を寓したものと見たものがある

さう考へられない事もなからうが、作者の意圖はやはりどこまでも興味本位であつて、勸善懲惡や因果應報を主眼としたのではなからう。弱者に同情し、義憤を感じて暴虐者に對して報復を圖らうとするのは人間共通の性情である。その人間共通の性情を當時の社會生活に題材を求めて表現した所に作者の興味があり、同時に讀者の興味が存するのである。

ともあれ、我が國物語の祖といはれる竹取物語や伊勢物語の如きロマンチックな物語が徐々に現實的傾向を増して、遂にかの名作源氏物語を産み出すに至つた展開の中途にあらはれた作品として文學史的意義も深い作品である。

なほ、この物語の中には男女間の消息文が非常に多い。又、結婚に關する記事が多い。その他當時の社會生活や家庭生活に關して興味ある叙述が豊富にある。文學を離れて、單にこれらの點についてみても非常に面白い作品である。

創作の年代

落窪物語はいつ製作されたか。この問題に關しては從來色々の説が出てゐるが、まだ根據の確實な定説はないのである。賀茂眞淵はその著伊勢物語古意の總論の頭書に

おちくぼは冷泉院の比に作りなして、中に道頼の大きい殿と云は、忠平公をや思ひけん、御子たちの宮のきそひざま、いとよく似たり。

といひ、松木直秀（號は琴園）は

村上時代よりは下らざるべし（落窪物語大成提要所引）

と斷じ、中村秋香はその名著落窪物語大成の提要に、

その文體によるに、圓融花山以前のものなるは疑なく云々

と斷定された。又、故藤岡博士は國文學全史平安朝篇の中に於て、

大成に、それと慥かに明示すべくもあらねど、圓融花山以前のものなりといへるは、最も穩健なる説なるべし。されどこの以前といふは、圓融花山の朝をも含めて汜りて冷泉に及べるものにして、村上を下らずといふは信じがたし。

と婉曲に説かれた。

しかし、以上の諸説は何れも確實な證據に立脚したものではなくて、單なる憶測か漠然たる想像の所産に過ぎないのである。

抑この物語の名が初めて見えたのは枕草子の成信の中將の條に、

げに交野の少將もどきたるおちくぼの少將などはおかし……

とある文である。枕草子は一條天皇の長保二年以後のものではないと思はれるから、落窪物語も長保二年より前である事は明らかである。すなはち、最も年代を新しく下げてでも長保二年より後には下らない。しかるに吉川秀雄氏は校註落窪物語の序文に、落窪は拾遺集の歌を引用する事が多いといふ理由から、この物語を拾遺集の後で長保前後のものとされたが、拾遺集の成立は一條天皇の寛弘二年以後と思はれるから、拾遺集よりは枕草子が先で、落窪物語は更にそれより先に出来た事になるから、吉川氏の説は成立しない。

山岸徳平氏はこの物語中の佛教に關する記事を精密に検討して、佛教思想の發達の上からと、この物語に記された八講及び賀と歴史上の事實との關係等によつて落窪物語の成立は圓融天皇の初年頃まで、即ち二三年間のものと推定された。以上の如く諸説があるが未だ決定的な創作年代を得る事は出来ないのである。

作者

落窪物語の作者は不明である。古くから源順の作であると傳へられてゐるが、源順は圓融院の永

觀元年に卒した人であるからこの物語の作者とする事は出来ない。一體源順は竹取物語や宇津保物語の作者にも擬せられたのであるが、それは彼の才學が和漢を通じて豊富であつた爲に假托されたのに過ぎないのである。もつとも最近橋本佳氏の如きは源順説の必ずしも否定すべからざる事を説いた。しからば誰を作者として考へる事が出来るか。これは創作年代の問題よりも一層困難であつて、恐らくはこの物語の作者の名は永久に暗の中に秘めかくされる運命にあるのではなからうか。たゞ作品の内容を通して想像すれば、滑稽な性格を有し相當の學識に富み、しかも人生の生活を深く體驗した中年以後の男性の貴族ではなかつたか。しかし、これも單に想像に過ぎない。

刊 本

寛政六年本

上田秋成校訂本

四 卷 六 本

寛政十一年に上田秋成が校訂して傍によみ假名・略註・考異等をつけたもの

國民文庫本

國民文庫刊行會

國文大觀本

板倉屋書房

日本文學全書本

校國文叢書本

有朋堂文庫本

新日本文學叢書本

校日本文學大系本

博文館

博文館

有朋堂

日本文學叢書刊行會

國民圖書株式會社

註釋書

落くぼ物語註釋 二卷

源道別

第一卷を上下二冊に分けて頭註傍書したもの。寛政六年の橘千蔭の序文が附けてある。

落窪物語解

田中大秀

初の一巻は道別の落くぼ物語註釋を底本とし、その頭と傍に朱・墨を以て書入れ二の巻以下は秋成校訂本を臺本として文政六年までに完成したもの。

落窪物語續解 草稿

田中大秀

落窪物語の補遺である。

落窪物語續解副卷

田中大秀

落窪物語語解の總論といふべきもので、凡例・人物傳・目錄の三部から成る。文政五年成る。

落窪物語證解

笠囚直麻呂

國文註釋全書に收められてゐる。本文を適宜に分節し、傍註を施すと共に語句を摘出して詳註を加へてある。

標註
參考 落窪物語

一冊

明治三十二年

飯田永夫

落窪物語大成

四冊

中村秋香

十數種の異本を以て本文を校訂し頭註傍註を施した。從來あらはれた註釋の中で最もすぐれてゐる。大正十二年に洋装一冊となつて再版された。

落窪物語講義

三冊

中村秋香

本文を適宜に分節して通釋を加へたもの。

國文
評解

落窪物語釋義

一冊

中村秋香

前書の表題を改めたものである。

口譯

落窪物語

一冊

大正元年

鴻巣盛廣

新	おちくぼ姫	一冊	大正十一年	濱中貫始
全譯	王朝文學叢書	第十卷	大正十四年	吉澤義則
落窪物語	新釋	一冊	大正十五年	吉村重徳
校	落窪物語	一冊	大正十五年	吉川秀雄

評論

源氏物語に於ける落窪物語の重なる影響（國學院雜誌第七卷第六號）長谷川福平

落窪物語宇津保物語研究（日本文學講座第十三・四卷）宮田和一郎

落窪物語の價值（わか竹第五卷第四號より）青木苦汀

落窪物語（岩波講座日本文學第二回配本）橋本佳

以上の外に山岸徳平氏は佳吉物語の解説（岩波講座日本文學第二回配本日本文學書目解説の中にあり）の中に於て、繼子憎みの説話としての落窪物語の要素を示されたのは非常に有益である。

目次

一の巻

今は昔中納言なる人の……………	一
おとゞもちごよりらうたくや……………	三
やうく物思ひしるまゝに……………	四
つくぐと暇のあるまゝに……………	五
三の君に御裳着せ奉り……………	六
後見といふは……………	七
かゝる程に藏人少將の御方なる……………	八
この帶刀の女親は……………	九
八月朔日ごろなるべし……………	一一
帶刀大將に参りたれば……………	一二
つとめておとゞひの殿に……………	一三
掣の少將の君の……………	一六
かくて少將言ひそめ給うて……………	一八
……………	二〇

十日ばかり音づれ給はで……………	二三
少將げにいひしらぬにやあらむと……………	二四
阿漕は三の君の御方の人にて……………	二五
のゝしりて出で給ひぬれば……………	二六
阿漕呼び出でたれば……………	二九
女君人なきをりにて……………	三三
君見たまへば……………	三四
女君なほ寝入らねば……………	三七
阿漕がふしたる所も近ければ……………	三九
男君いとかうしもおぼいたるは……………	四一
御車ゐてまゐりたり……………	四四
阿漕あいなくいとほしけれど……………	四六
もて参りてこゝに御文侍るめり……………	四八
御返事とは乞へば……………	五〇
阿漕猶こたびはといへど……………	五三
さて阿漕唯一人して……………	五四
今はおはしぬらむとて……………	五五

今宵は袴もいとかうばし……………	五九	おはし給ひぬる爲に……………	六〇
女君わりなく苦しと思ひて……………	六〇	鏡の箱の代り……………	六一
夜ざりは三日の夜なれば……………	六一	その夜はうちに参り給ひて……………	六四
少將の御許より……………	六四	御髪まゐらせ給はむとなりけり……………	六六
阿漕が許には……………	六五	いと理なげなる氣色にて……………	六九
日やうく暮るゝ程に……………	六六	三の君この文を北の方に……………	一〇〇
暗うなるまゝに……………	六九	暮れぬればおはしぬ……………	一〇一
もて参りたる程……………	七三	三の君の夫藏人少將……………	一〇三
阿漕かく出でたち給ふもしらで……………	七三	下襲裁ちてもていましたれば……………	一〇五
我はたゞ白きお衣一重を……………	七四	女あれにもあらで……………	一〇七
帶刀が曹司にて……………	七五	うへのきぬ裁ちておこせたり……………	一〇九
阿漕この餅を箱のふたに……………	八〇	北の方多くの物どもを……………	一一二
帶刀許いきたれば……………	八一	少將の君はいかゞいふと……………	一一六
女斯くかくれもなき所に……………	八三	少將几帳押しやりて……………	一二三
お物も出で來にたれば……………	八五	阿漕は少納言ありと思ひて……………	一二三
斯うて晝までふた所にい給へる程に……………	八六	こなたに几帳たてたれど……………	一二五
参りたるやうは……………	八九	北の北聞きはてて……………	一二七

二の卷

少將の御許より御文あり……………	一元
この少將出でぬるすなはち……………	二三
阿漕惑ひ出でて……………	二五
君は我にもあらずおとどのお前に……………	二七
北の方落窪におはして……………	二九
阿漕思へどくつきもせず……………	三一
かの少將聞きて……………	三三
聞ゆれば少將いと悲しく……………	三五
阿漕いかで物まゐらむ……………	三六
阿漕がもとに少將の御文あり……………	三八

阿漕この年ごろいみじく……………	一六
阿漕もいとにくけれど……………	一八
阿漕遣戸ひきたて……………	二〇
阿漕翁の文を見れば……………	二二
北の方は典藥に預けつと思ひて……………	二四
北の方鑰を典藥にとらせて……………	二六
帶刀など今まではおり給はぬぞ……………	二八
午の時許りに……………	三〇
いともらうたげにて居たるを……………	三二
かの殿には物見て歸り給うて……………	三四
おとど留りたりける男一人たづね……………	三六
いでやよし……………	三八
二條殿にはおんとなぶらまゐりて……………	四〇
少將の君殿に坐したれば……………	四二
和泉守のかへりごと……………	四四
かの中納言殿には……………	四六
かの少將は北の方いと妒く……………	四八

かくて月たちて……………	二〇二
いと嬉しき事に侍るなり……………	二〇五
二條殿におはしたれば……………	二〇七
中納言殿にはその日になりて……………	二〇八
少將いかならむと思ひやられて……………	二一〇
かの殿には御文待つほどに……………	二二三
三日のまうけいといかめしう……………	二二六
藏人の少將の君……………	二三〇
少輔いつとなく臥したりければ……………	二三三
かく女もわびしと思ひわび……………	二三四
かの二條殿には日々……………	二三六
かくてつごもりになりぬ……………	二三七
三の君の藏人の少將……………	二三〇
正月つごもりに……………	二三三
車にほの聞きて……………	二三五
いと深き堀にて……………	二三七
中納言殿の北の方……………	二三八

暫し立てるに人さわがしく……………	二四一
辛うじて明けぬ……………	二四二
女君いと心憂くけしからず……………	二四五
かかる程に六月になりぬ……………	二四七
中將殿によき若人ども……………	二四九
見るにかの部屋に居給へりしほど……………	二五二
北の方このたびの御聲どりの……………	二五一
さるほどに右大臣にておはしける……………	二五二
君は右大臣の御聲に……………	二五七
女心うしと思へるけしきや……………	二五八
明けぬれば帶刀に衛門がいふ……………	二六〇
御乳母出で来ていふやう……………	二六三
中將面うち赤めて……………	二六五
中將の君は女君の例のやうならず……………	二六九
かく思ふやうにのどやかに……………	二七一
北の方の御文にも……………	二七三
中將の君やがて二條にとおぼせど……………	二七六